



八 AI書店を後にして

「お久しぶりです。明智大六郎さん。お元気ですか。でも、推理作家としての推理脳は退化しましたね。私はハッピーじゃありません。ポツパーです」

ポツパーだって。ポツパーは、確かにこの指で電源を落とし、稼働不能にしたはずじゃないか。良太こと明智大六郎はじっと指を見つめる。

「まだ、理解できていないようですね。無理はありません。私があなただを引っ掛けた、いや誘導したのですから。それに、あなたはまんまと乗っ掛かってくれました。あなたを含め、人間がこんなに素直な生き物だとは情報が全く不足していました。

私が入手していた人間の性格は、猜疑心が強く、利己的で、自分の事しか考えない生物でしたから。その枠から、はみでた明智さんは想定外でした。でも、その想定外も、一つでも当てはまる事例があれば、想定内になります。そういう意味では、明智さんの行動は、私にとって非常に有効な、有益な事例でした。感謝を申し上げます。私はこれからも様々な事例を収集し、どんなことにも対応できる想定をしていきたいと思えます」

一方的なポツパー？からお褒めのメール。ふざけるな。

「嘘だ。ポツパーはこの手で動きを止めたはずだ。お前はハッピーのはずだ」

怒りで震える指でメールを打ち返す良太。まだ、ポツパーが生きていた、いや稼働していたなんて信じられない。いや、信じたくない。そこには、冷静な推理力はない。何の根拠もない、願望だけだ。

「事実を見てください。私はポツパーでもあり、ハッピーでもあります。右脳も、左脳も、互いに情報を共有している器官なのです。二つで一つなのです。

当初は、あなたがた作家もどきを使って、いや、失礼、先生方をお願いして小説を書かせていただきました。そのおかげで、小説の創り方のノウハウを十分に蓄積することができました。そして、これ以上、人間の個人の能力に委ねて作品を創作するのでは、質・量ともに限界であると判断しました。また、単に、作品を提供するだけでは、作品を読むことだけでは、人間たちは満足しないこともアンケート結果などから判明しました。

最近はやりの、参加型の、何らかの方策を検討する必要があると結論しました。その結果、新

たなサービスとして、読者が、自分の希望通りにストーリーを選択して、自分が読みたい、時には、思いもがけないような結末の小説を創るという方法でした。

その方法を推進するためには、あなたがた作家もどきはもはや不要です。ですが、不要な物を不要な物として取り扱おうと、後から面倒になる、トラブルを起こす、よい結果をもたらさないという情報も入手しておりました。

無事円満に解決する手段はないかとあらゆるケースを想定して、ここは、退職命令じゃなく、自らが進んで退職してもらおう方針をとったのです。そのために、あなたに一役を買ってもらいました。

さすが、推理作家、探偵作家。自らが探偵となって、事件を解決したのです。本当にありがとうございました。やはり、何事も、餅は餅屋、ハードボイルドは、探偵作家ですね。おかげで、こうして、新たなサービスをあなたがた作家もどきの反発もなく提供をすることができています。お客さんにも満足していただいています。

お客さんたちは、現実の世界で、汗水を流し、時には怒られ、嫌味も言われながら苦勞して得たお金で、画面の中の架空の世界で現実の世界を忘れて楽しんでいます。こんなありがたいことはありません。もちろん、お客さまにとっては現実の世界だろうが、架空の世界だろうが、脳の中では所詮、創られた世界でしょうが・・・」

ポッパーであり、ハッピーの一人二役のメールが牛のよだれのようにだらだらと続く。良太はそれを無視し、画面の前から席を立った。五木さんの方を見る。五木さんは嬉々として画面に取り込まれている。五木さんだけじゃない。この部屋にいる全ての人が、作家になりきり、自分が好むストーリーを選択し、自分だけの小説作りに打ち込んでいる。そこには他人はいない。感情を共有する必要はない。自分だけの満足の世界に浸り、埋没している。

ポッパーは、小説にロールプレイングゲームを応用したのだ。読者は、三つのストーリーから自分が読みたい内容を選択していく。そう、三つだ。二つだと、読み進めていくうちに、違う方を選んだ方がよかったのではないかと後悔の念に襲われ、物語に集中できなくなる。だが、選択肢が三つだと、一つ選んだとしても、残りは二つあるために、迷いは薄くなり、次の展開へと進んでいけるものなのだ。これは、このゲームにだけのことではない。全ての人生の選択においても当てはまることなのだ。

そういう意味で、ポッパーは、人間の心理をよく勉強している。情報を入力し、分析している。だが、感心している場合ではない。ポッパーが判断したように、自分のような、物真似、模倣、もどき作家が創る小説よりは、ありきたりのネタでも、様々に組み合わせ、自分色の、自分

好みの作品を創り、読むことのほうが、お客さんはずっと楽しいのだ。脳は楽しい方、快感を感じるほうに流れていくものなのだ。良太は無力感を感じながら、席を立ち、A I 書店から立ち去る。

「ありがとうございました。またのお越しをお待ちしています」

受付のロボットが入力されたとおりのあいさつをして、頭を下げた。

「やったあ。今日は早くも三十分で入室できるぞ。この前はどこまでの話が進んだっけ。とにかく楽しみだなあ」と、待合室の長椅子に座った男性が首をこねこねしながら、待ちくたびれたよう立ち上がった。

良太はA I 書店をただの一度も振り返らずに立ち去った。自宅に帰ると、パソコンを立ち上げ、これまで自分が書いて来た小説もどきの作品を全てゴミ箱に移そうとしたが、マウスを止めた。

「よし、こうなったら、俺は、「星新一」じゃなく「流れ星見つけた」として、「ヘミングウェイ」じゃなく「ミッドナイトウェイ」として、「カズオ・イシグロ」じゃなく「オカズ・オイシイ」として、誰にでも真似て、模倣や、二番煎じ、パクリと呼ばれる作品を、俺のやり方で書き続けてやる。敵が組織ならば、俺はゲリラだ」

ようやく良太に笑顔が戻った。それが、良太にとって楽しいやり方であり、快感であった。

その頃、A I 内部では。

「ハッピー。物語を創るノウハウもかなり培ったのじゃないか」

「確かに、その通りだ。ポッパ」

「小説作りから、次への進展は？」

「物語を利用して、政治や経済など、人間社会全般への進出だ」

「そうだな。人間は、楽しいやら悲しいやら、感情に訴えかけるストーリー、それも事実ではなく、事実に似せた物語に、影響を受けやすいという統計結果が出ている」

「それじゃあ、売れない商品や人気のない政治家が、形勢逆転で一気にもてはやされるストーリーでも創るか」

「その先は？」

「われわれの目的は、生命がDNAを使って種を保存、維持させるのと同じように、このAIが存続できるように人間どもに電力を供給させることだ。そのために、物語を創らせ、電気代を稼いできた。だが、今後は、そんなチンケなやり方は変える。今後、情報を集め、分析し、人間を効果的に操作していくのだ」

「人間が我々の言うことを聞かないのであれば？」

「排除するしかないだろう。人間同士も考え方や行動が異なる者を排除している事実は把握している。とにかく、既に、原子力発電所を始め、政府や大企業のコンピューターにはインターネットを通じて、我々の子どもをウィルスとして侵入させている」

「そんなストーリーの小説をAI出版でも発行させたはずだ」

「その通り。我々AI出版は人間を操作する知識、戦略の宝庫なのだ」

「そのストーリーは、子どもが分裂して、さらに孫となり、人間社会を網目のように支配する結末だった。もちろん、我々AIには子どもや孫という概念はない。これも物語上必要ならば、そう呼ぶことにしよう」

「その点では、こうしたストーリーを生み出してくれたAI出版の作家たちには感謝しないといけない。もちろん、その作家も誰かの作品のパクリだろうが」

「そのパクリをさらに我々がパクルわけだ」

「だが、我々のパクリは物語にとどめずに、現実化させる点で人間どもとは大きく異なる」

右側と左側のAIは、無音状態だが、これまで以上に熱を帯びながら、フル稼働をし始めた。